文部省著作

高等小學讀本 二

發行所 日本書籍株式會社

教科書文庫
4
810
32-1904
2000301857

43078
教科書文庫
4
810
32-1904
2000301857

教科書文庫
4
810
32-1904
2000301857

文部省著作

高等小學讀本 二

發行所 日本書籍株式會社

広島大学図書
2000301857

資料室
375.9
M014

目錄

第一課　秋の野山……一
第二課　種子の散布……三
第三課　イチヨー……九
第四課　安倍仲麻呂……十二
第五課　助船……十四
第六課　海ノ話……二十
第七課　浦島子……二十五
第八課　紫式部……二十九
第九課　稅所敦子……三十一
第十課　名古屋城……三十六
第十一課　わが陸軍……三十九
第十二課　聯隊旗……四十六
第十三課　廢物利用……四十七
第十四課　製紙……五十二
第十五課　源爲朝……五十八
第十六課　一谷の戰（一）……六十一
第十七課　一谷の戰（二）……六十四
第十八課　アイヌ……六十九
第十九課　二人の旅人と熊……七十四
第二十課　笠置落……七十七

東京大學圖書之印
廣島大學圖書
廣島大學 教 14798 圖書

殘菊

第一課　秋の野山。

殘れる暑さ、やうやく、去りて、吹く風涼しきころとなれり。かきねのあさがほの花、もはや、さかぬよーになりて、菊の花、美しく、さきいでたり。

一年のうち、暑からず、寒からずして、ここちよきは春と秋とにして、秋のうち、ことに、ここちよきはこのごろなり。されば、つねの日には、よく、勉めて、晴れたる日曜日などには、思のままに、遊ぶべし。

まづ、野べに、遊ぶべし。たんぼの稻の、いちめんに、黃色になりて、風吹くごとに、黃金（こがね）の波のうつはこの

ごろなり。いなぼをついばむすずめのむれの、なるこの音に、おどろかされて、ぱっと、とびたつもこのごろなり。道のべのすすきの風になびくも、川べの野菊のかげを水にうつすも、また、このごろなり。

次に、山に、遊ぶべし。やまがら、ひわ、ほほじろなどの、さへづりながら、枝より枝へ、とびまはるはこのごろなり。栗のみの、はらはらと、落ち、まつだけ、しめじ、はつだけなどの、こなたかなたに、おひいづるもこのごろなり。谷間のもみぢの色づきはじむるも、また、このごろなり。

落

あー。かく、野に、山に、樂のみちみちたるはこのごろなり。されば、つねの日には、よく、勉めて、晴れたる日曜日などには、野に、山に、遊ぶべし。やがて、菊の花の色もかはりて、霜降り、雪降るころにいたらば、遊ぶをりも少かるべし。

第二課　種子の散布

植物に、果實がなるのは、その同類をふやすためで、その果實、または、果實の中にある種子が、じゅくして、じめんなどに、落ちると、その種子から、しぜんに、芽が出て、根が出て、しまひには、一つの、まんぞくな植

果實

吸

物になるのである。

しかし、植物には、たいてい、一本の木、一本の草に、數限のないほど、果實がなるものであるから、それが、みんな、その下に、落ちたなら、たとひ、その種子がはえたとしても、じゅーぶんに、日にあたることができず、また、清い空氣を吸ふことができないで、とーていい、まんぞくな植物になることができないものである。

それで、植物には、その種子が、方方に、散布されるために、それぞれ、しぜんに、つごーのよい方法がそな

熟・甘

はってをる。

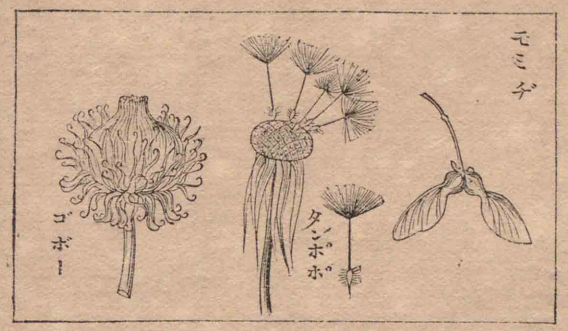
柿、梨、林檎などの果實は、熟すると、多くは、人や、他の動物にたべられる。そして、その種子は、すてられたり、または、果肉といっしょに、のみこまれて、ふんにまじって、出たりして、方方に、散布される。

いったい、これらの果實は、熟しないうちは、色も青く、味もしぶくて、熟すると、色も美しく、味も甘くなるものであるが、その色の青く、味のしぶいのが、しぜんに、人や、他の動物にたべられるのをふせぐことになり、その色の美しく、味の甘いのが、しぜんに、人

生

や、他の動物にたべられることになるといふのは、まことに、おもしろいことではないか。

また、もみぢ、松などの果實は、ちょーど、羽をひろげたよーに、できてをり、たんぽぽ、あざみなどの果實には、毛のよーなものがついてをる。それで、風が吹くと、たやすく、方方へ、とんで行く。もみぢやたんぽぽなどの、ときどき、思ひもよらない所に、生えてをるのを見るのは、まったく、このためで



岸

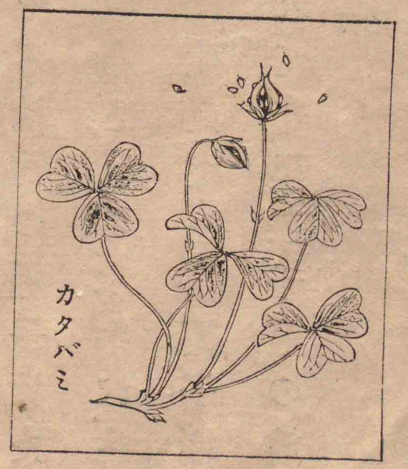
ある。

また、ごぼー、やぶじらみ、みづひきなどの種子には、毛やとげのよーなものがついてをる。それで、人の着物や、他の動物のからだなどについて、しぜんに、方方に、散布される。

それから、また、水中に、生えてをる植物の種子は、たいてい、水に流されて、方方に、散布される。水中に、生えてをらないものでも、海岸に、生えてをる椰子樹などは、その果實が、波に運ばれて、千里二千里の、遠い所の岸に、生えることがある。

類

以上は、植物の種子が、動物とか、風とか、水とかの力によって散布されることをいったので、あるが、まだ、このほかに、じぶんの力で、種子を散布するものもある。すなはち、ほーせんか、かたばみ、その他、豆類などは、實が熟すると、さやがはじけて、そのはじける勢で、中の種子を、四方に、散布する。



へいぜい、きづかないことでも、しらべてみると、なかなか、おもしろいことのあるものである。

向　曲

第三課　イチヨー。

イチヨーハ、ワガ國ト、支那ノ一部トニノミ、產スル喬木ナリ。枝ハムラガリ出デテ、ソノサキ、ミナ、ナナメニ、上方ヘ向ヘリ。サレバ、冬、葉ノ落チタル時、遠方ヨリ見レバ、アタカモ、クサバウキテ、サカサマニ、立テタルガゴトクニシテ、ソノ樣、他ノ木トハ、大イニ、コトナリ。マタ、コノ木ハ、ソノサキ、多ク、北方ヘ向ヘリ。コレ、夏、コノ木ノ成長盛ナル時ニ、南風ノ、强ク、吹クコト多ケレバ、ソレニ吹キアテラレテ、カク、曲レルナリ。

兩面

コノ木ニハ、雄木ト雌木トアリ。雌木ニハ、秋、果實ミノル。コノ果實ヲ銀杏トイフ。果肉ハ臭氣アレドモ、種子ハ、ウマクシテ、食スベシ。

コノ木ノ葉ハアフギナリニシテ、葉ノ兩面ニ、多クノ、タテノスデアリ。秋ノ末ニナレバ、ミナ、黃色トナ

乳

リテ、ハナハダ、美シ。

コノ木ハ、昔ヨリ、多ク、神社、佛閣ノ境内ニ、植エタリ。

中ニモ、鎌倉ノ鶴岡八幡宮ノ社前ニアルモノハ、コトニ、名高シ。

コノ木ノ、年ヲヘタルモノハ、幹ノ、高キ所、マタハ、枝ノ下部ヨリ、フトキ根ノゴトキモノ生ジテ、マッスグニ、タレ、アタカモ、乳房ノゴトキ樣ヲナスコトアリ。

世ニ、コレヲイチョーノ乳トイフ。

第四課　阿倍仲麻呂

昔、わが國と支那との交通盛なりしころは、しばし

留學生

使者

ば、學識あるものをえらび、留學生として、支那につかはしたりき。阿倍仲麻呂はその留學生の一人なり。

仲麻呂の留學生となりしは、十六歳のときなりしが、もとより、博識、多才の人なりければ、このころの支那の皇帝、大いに、これを愛し、しだいに、高官にすすめたり。

仲麻呂、支那にあること五十年、かく、しだいに、高官にすすめられたれども、つねに、日本のことのみ思ひつづけゐたり。ある年、日本の使者、支那に、いたり

弔

任

しかば、仲麻呂、大いに、喜びて、ともに、その船に乗りて、歸らんとせり。

たまたま、海上にて、大風吹き出で、船はただよひて、あんなんといふ國に着きたり。支那の人人は、仲麻呂を死にたることと思ひて、詩を作りて、弔ふものもありき。しかるに、仲麻呂は、その後、ふたたび、支那に、いたりしかば、人人、その無事なりしを見て、大いに、喜びたり。皇帝も、また、大いに、喜びて、もとのごとく、高官に任じたり。かくて、仲麻呂は、七十歳のとき、つひに、支那にて、死にたり。

位

そもそも、昔の船は、そのくみたて堅固ならざりしかば、使者、または、留學生の、支那に、往復するときには、つねに、朝廷にて、神をまつりて、無事をいのり、船に位をさづけなどしたまひたり。されど、ややもすれば、離島に、吹き流され、または、波風に、くだかれて死ぬるものもありき。

それだから

仲麻呂は、さいはひに、命は助りしかどもなほ、日本に、歸るをえずして、やみたり。その遺憾思ひやるべきなり。

第五課　助船。

浮

箇

あらしが日本海の海岸をあれてゐる。一そーの船が、あらい波の中を、浮いたり、沈んだりして、しきりに、助をもとめてゐる。助船の用意は、おほかた、できた。しかし、こぎてが、まだ、一人、たらない。

濱吉は、りょーしの子で、この村中でのこぎてである。

濱吉は、これを見て、「そのなかまにはいらう」と思って、そばに、立ってゐる母にむかって、

「おかあさん。私をやってください。」

といった。

濱吉の母は、六箇月前から、たより少い身になってゐ

る。夫は、ことしの春、小さな船に乗って、沖に、出たが、その夜、にはかに、吹き出した大風このかた、いまに、歸って來ないのである。それで、母は、いまは、ただ、濱吉一人を杖とも、柱とも思ってゐる。それだから、そんな、命がけの仕事には、どうしても、やる氣にはなれないのである。

しかし、母は顔を上げて、沖の船を見た。そして、「あの船には、人が、おほぜい、乘ってゐる。その人たちには、めいめい、妻もあらう。子もあらう。今、濱吉をやらないとすると、助船を出すことができないだらう。できないとすると、その妻や子は、また、じぶんたちのようなふしあはせな身の上になるだらう。」と考へた。

考案

そこで、母は思ひきって、きっぱりとした聲で、

「濱吉。行け。行け。早く、行って、あの船の人たちを助けてあげよ。」

といって、袂で、顔をおほって、うちにかけこんだ。そして、その夜は、夫のことを思ひ出したり、子のことを案じたりして、まんじりともしなかった。

夜が明けて、あらしはやんだ。沖の船は沈んでしまったが、助船の働で、乘ってゐた人人は、みな、助かった。助船

居

では、濱吉が、いちばん、めざましい働をしたといふことである。

濱吉の母は、いま、一人の村の人と、話をしてゐる。村の人は、濱吉のめざましい働をしたことについて、しきりに、ほめて、話してゐたが、「濱吉はどうしたのでせう。いまに、歸ってきませんが。」といふ問にこたへて、

「濱吉さんは、おっつけ、歸ってきませう。さっき、濱べで、村の人たちと、話をしてゐました。わたしも、そこに、居たのでしたが、『早く、おしらせしよう。』とおもって、

危

來たのです。まー。お聞きなさい。めづらしいことがあります。

ゆうべ、濱吉さんたちがたすけた人の中に、一人のりょーしが居ました。その人は、六箇月ばかり前、沖で、あらしにあって、すでに、危かったところを、外國船に助けてもらひました。けれども、その船は、外國へ、行く途中でしたから、そのまま、外國へ、行きましたが、こんど、日本に、來る便船があったから、それで、こっちへ、歸って來ました。そして、なつかしい、じぶんの村が見え出したころ、にはかに、ゆうべの

風が吹き出しましたので、「こんどこそ、死ぬるか。」と思ってゐたさうです。濱吉さんたちは、そこへ、助けに、行ったのです。」

村の人が、かう、話をしてゐるうちに、一人の、やつれたりょーしが、濱吉や、ほかの村の人人といっしょに、はいって來た。母は「あっ。」とさけんで、そのうでにすがりついた。

表面

第六課　海ノ話。

海ハ、地球ノ表面ノ大部分ヲシメテヰテ、陸地ノ面積ノ三倍ホドアル。マタ、ドコマデモ、ツヅイテヰテ、

淺

陸地ノヨーニ、ハナレバナレニハナッテヰナイ。海ハ、タイテイ、海岸ニ近イ所ハ、ワリアヒニ、淺クテ、海岸ヲ遠ザカルニツレテ、ダンダン、深クナルモノデアルガ、オヨソ、六百六十尺ノ深サノ所ニナルト、キューニ、深クナルモノデアル。

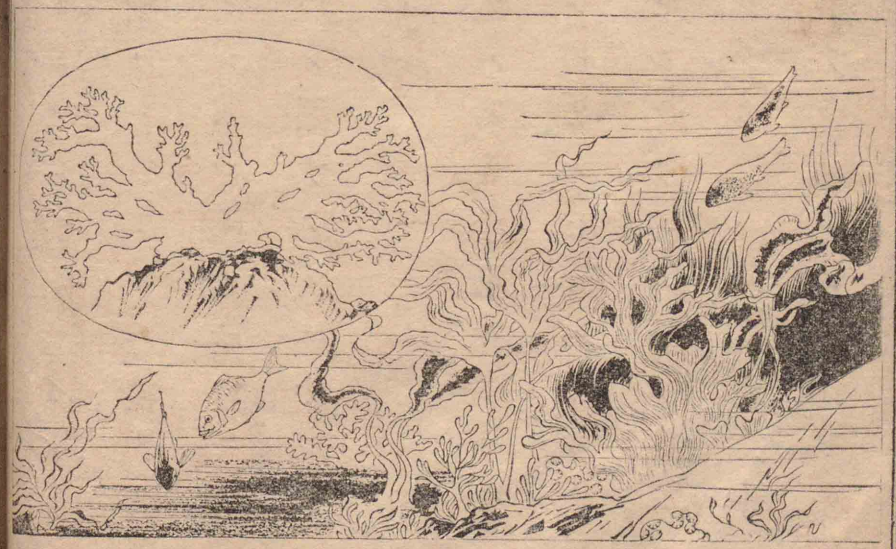
底

六百六十尺ヨリ淺イ海ノ底ハ、砂ヤ小石ヤドロナドデ、デキテヰテ、イロイロノ貝ガハヒマハリ、ワカメ、コンブナドノ海藻ガオヒシゲッテヰル。マタ、所ニヨッテハ、珊瑚ガ、美シク、枝ヲツラネテヰル。六百六十尺ヨリ深イ海ノ底ハ、ゴク、小サナ動物ノカラヤ、赤

低

イ粘土ナドデ、デキテヰテ、砂ヤ小石ハ、少シモ、ナク、貝モ居ナイシ、海藻モ生エテヰナイ。マタ、高低ガ、タイソー、少クテ、二三箇所ヲノゾイテハ、ホトンド、平ダトイッテヨイホドデアル。

海ノ水ハ塩分ヲフクンデヰル。シカシ、ソノ塩分ノ分量ハ、所ニヨッテ、チガッテヰテ、



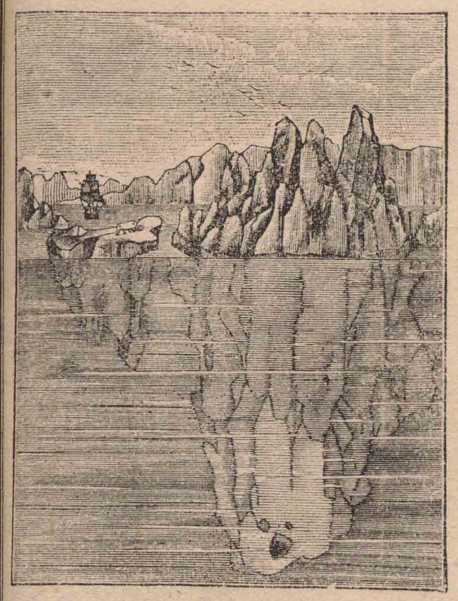
放

ワガ國デモ、瀬戸内海ナドノ水ハ、タイソー、塩分ニ富ンデヰル。マタ、海ノ水ハ藍色ヲシテヰル。シカシ、所ニヨッテハ、ホカノモノノマジルタメニ、ソノ色ガ、イチジルシク、カハッテヰテ、支那ノ黄海ハ、黄河トイフ川カラ、黄色ナ土ヲ流シコムタメニ、キイロクナッテヰルシ、アジヤトアフリカトノ間ニアル紅海ハ、ゴク小サナ動物ガ浮ンデヰルタメニ、赤クナッテヰル。コノホカ、夜光虫ナドノ光ヲ放ツタメニ、夜、海ノ水ノ光ル所モアル。

マタ、海ノ水ハ、ソノ下部ハ、ドコデモ、イチヨーニ、ツ

メタイモノデアルガ、ソノ表面ハ、陸地ノヨローニ、所ニヨッテ、溫度ガチガフモノデアル。地球ノ、ズット北カ、ズット南カデハ、海ガ、一面ニ、コホッテヰテ、ソノアツサノ、六七尺ニオヨブモノガアル。マタ、氷山トイフ、山ノヨローナ、氷ノカタマリガ浮イテヰテ、ソノ直徑ノ、二里ニ達スルモノモアル。

氷



海ノ水ノ中ニハ鯨、オットセイ、ラッコナドトイフ海獸ヤ、鯛、鰹、鯡、ソノホカ、イロイロノ魚類ガスンデヰテ、ワレワレハ、コレヲ、銃ヤ釣針ヤ網ナドヲ用ヒテ、トル。マタ、珊瑚ナドハ、潛水器ヲ用ヒテ、トル。マタ、貝モ、海藻モトリ、海ノ水カラハ、塩モトル。ジツニ、海ハ、共有ノ寶藏トイフベキモノデアル。

共有

第七課　浦島子。

春の日かげののどかにて、
波しづかなるよさの海。
海上、遠く、船出して、
島子のつりをなせるとき、

波の中より、一匹の
　大亀出でしが、たちまちに、
化して、をとめとなりにけり。』
　をとめ、しづかに、いへるよ、
「われ、今、君をみちびきて、
　蓬萊宮に、いたるべし。
いざ。いざ。早う。」といふままに、
　島子は、あとに、從ひて、
行くや、千尋の海の底。
　五百重の波をかきわけて、

衣　玉

蓬萊宮にいたりけり。』
　あやの衣を身にかさね、
あまたのものにかしづかれ、
　玉のうてなに、浦島子、
長き月日を送りしが、
　おのが故郷の、なにとなく、
こひしきままに、「いま一度、
　歸らんもの。」と、そのよしを、
をとめに、いへば、泣く泣くも、
　またあふまでのしるしにと、

取りて渡せり。玉手箱。」

島子、故郷に、歸り來て、

見れども、おのが家見えず、

さがせど、おのが父母あらず。

父母

せんかたなくて、その箱の

ふたをあくれば、あやしやな、

白雲、中より、たちのぼり、

かなたに、なびくと、見るうちに、

若きすがたは消えうせて、

しらがの翁となりにけり。」

第八課　紫式部。

紫式部は藤原爲時のむすめなり。幼きころより、もの

のおぼえよくて、兄の書を讀むを、かたはらにて、聞

きて、よく、記憶したり。されば、爲時、大いに、これを愛

し、つねに、その頭をなでて、「なんぢの男子ならざる

が殘念なり。」といひたりとぞ。

幼

式部は、藤原宣孝に、嫁ぎたりしが、不幸にも、早く、夫

に、わかれたれば、それよりは、ただ、二人のむすめを

不幸

そだつることと、書を讀み、文章を書くこととのみ

を樂となしゐたり。

好

著

賞

このころ、一條天皇の中宮に、上東門院と申す御方おはしけり。はなはだ、學問を好みたまひて、婦人の、學問に、すぐれたるものをえらびて、めしたまひけるが、式部の才學あることを聞きたまひて、また、これをめしたまひき。式部、すなはち、つかへまつりて、漢籍などを教へまゐらせたり。

式部の著したる書に、源氏物語といふものあり。五十四帖に分れたる大作にして、そのすぢもおもしろく、文章も、はなはだ、たくみなれば、天皇これを見たまひて、「學識あるものの作なり。」とて、大いに、賞し

宮中

たまひき。この書は、今にいたるまで、文章の模範として、多くの學者に愛讀せらる。

式部は、かく、非常の名譽をえたれども、少しも、たかぶることなく、ますます、學問をはげみ、また、その身の行をつつしみたり。

式部が、二人のむすめは、姉を大貳三位といひ、妹を辨局といふ。母にして、才學すぐれたりしかば、いづれも、えらばれて、宮中に、つかへまつりたり。

第九課　稅所敦子

稅所敦子は京都の人なり。幼き時より、學問を好み、

産

孝養

ことに、文章、和歌にすぐれたり。後、そのころ、京都に、居りし、鹿兒島の藩士、稅所篤之といふ人に、嫁ぎたりしが、不幸にして、早く、夫に、わかれたり。その時、敦子は、すでに、長子を産み、また、次子をはらにやどしたりしが、その子は、生れて、まもなく、死に、殘れる長子もおもき天然痘にかかりたり。

敦子は、かく、かさねがさねの不幸にあひたれども、もとより、ををしきうまれつきなりければ、心を定めて、夫の故郷なる鹿兒島へ、下りたり。そこには、なほ、姑のありければ、それにつかへて、孝養をつくさ

才德

んとてなり。

さて、そのころは、いまだ、汽車、汽船などの便利もあらざりければ、敦子は、種種の難儀にあひ、長き日數をへて、やうやう、鹿兒島に、いたりたり。

しかるに、姑は、いまだ、敦子の人となりを知らざりしこととて、はじめは、敦子に、はなはだ、つらくあたりたり。されど、敦子は、ただ一心に、孝養をつくしければ、まもなく、姑は、敦子を信じて、このうへもなきものと思ふにいたれり。

かくて、ありけるほどに、藩主、島津齊彬、敦子の才德

世

のすぐれたることを聞きて、あとつぎのもりやくに、あげたり。敦子は、日夜、心をつくして、もりたてけるが、不幸にして、そのあとつぎ、早く、世を去りたり。敦子は、非常に、なげき悲みけれども、せんかたなかりければ、家に、歸りて、もとのごとく、姑につかへたり。

その後、齊彬の弟、久光、そのむすめを、近衛忠房に、嫁がしめんとて、よき侍女をもとめたり。この時、敦子は、また、えらばれて、侍女となりて、近衛家に入りたり。

文章

古

後、明治八年、皇后陛下の、女子の、才學すぐれたるものをめしたまひしとき、敦子も、また、あげられて、宮中の女官となりたり。

敦子は、宮中に、ありては、おもに、文學のことに、あづかり、文章、和歌などにつきて、人の問に答へ、また、みづからも、ますます、學問をはげみたり。その歌集に、御垣の下草といふものあり。すぐれたる歌、はなはだ、多し。

敦子は、かく、才學もすぐれ、その婦德も高かりければ、人人「古の紫式部に、よくも、にたるかな。」といひあ

命

ひたりといふ。

第十課　名古屋城。

東海道鐵道ノ汽車ニ乘リテ、名古屋ヲスグレバ、ハルカニ、天守閣ノ、空ニ、高ク、ソビユルヲ見ルベシ。コレ、スナハチ、名高キ名古屋城ナリ。

名古屋城ハ、名古屋市ノ北部ニ、アリ。昔、德川家康ノ諸大名ニ命ジテキヅカシメ、ソノ子、義直ノ居城トシタリシ所ナリ。コノコロハ、德川氏ノ勢、ハナハダ、盛ナル時ナリシカバ、諸大名、ミナ、ソノ勢ニ、恐レテ、多クノ費用ト勞力トヲヨシマズシテ、建築シタリ。

堅固

日光

サレバ、コノ、名高キ城モ、ワヅカニ、一年餘ニシテ、成レリトイフ。

コノ城ハ、深キ堀、高キ石垣ヲメグラシテ、ハナハダ、堅固ナリ。コトニ、天守閣ハ、堅固ナル石垣ヲタタミテ、礎トシ、ソノ上ニ、五重ノ閣ヲツクリタルモノニシテ、棟ノ兩端ニハ、金ヲキセタル鯱ヲ置ケリ。鯱ハ、高サ、オヨソ、一丈アリテ、日光、キラキラト、コレニ映ジ、ソノ美シサイハンカタナシ。コノ城ノ名高キハ、ジツニ、コレアルガタメナリ。

コノ天守閣ハ、諸大名ノ中ニテ、コトニ、名高カリシ

加藤清正ノ、ソノ一手ニテ、キヅキタルモノニシテ、石材ナドハ、熱田港ヨリ、人夫ヲシテ運バシメタルモノナリ。

サテ、ソノ石材ヲ運ビタル時ノ有様ハ、ジツニ、メヅラシク、ハナバナシキモノニシテ、大ナル石材ヲ、毛氈數十枚ニテ、包ミ、ソノ上ヲ、青色ノ、太キツナニテ、ククリ、サラニ、地車ニノセテ、多クノ人夫ニヒカシメ、美服ヲ着タル兒童ヲ石材ノ上ニノセ、清正ミヅカラハ陣羽織ヲ着、片鎌ノ槍ヲツキ立テテ、石材ノ中ホドニ、立チハダカリ、サイハイヲフリナガラ、音頭ヲトリタリトイフ。

太

美

コノ城ハ、明治維新後、一度ハ、陸軍省ノ所轄トナリシガ、後、ソノ幾部ハ帝室ノモノトナリテ、名古屋離宮ト稱セラル。カノ、名高キ天守閣ハコノ離宮ニ屬セリ。

第十一課　わが陸軍。

わが陸軍には、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵などの兵種がある。そのうち、歩兵は、他の兵種にくらべると、人員が、ずっと、多い。

歩兵は、平時、およそ、百數十人づつ、集って、中隊になって

聯隊

をるが、ふつー、これを、三つの小隊に、分ける。また、中隊が、四つ、集って、大隊になり、大隊が、三つ、集って、聯隊になってをる。この聯隊には、大元帥陛下のおわたしになった聯隊旗がある。また、聯隊が、二つ、集って、旅團になり、旅團二つと、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵などのいくらかづつとが集って、師團になってをる。

大坂

わが國には、師團が、十三、ある。すなはち、近衛師團と、第一から第十二までの、十二の師團とであって、これらの師團には、それぞれ、師團司令部が置いてある。師團司令部は、東京、仙臺、名古屋、大坂、廣島、熊本、金澤、

所在地

小倉などの要地に、置いてあって、たいてい、昔の城址をつかってをる。しかし、師團を組み立ててをる旅團や聯隊などは、師團司令部の所在地ばかりではなく、諸方にも、配置してある。また、要害な地には、要塞をまうけるか、警備隊を配置するかしてある。また、臺灣には、臺灣守備混成旅團が置いてある。これは、かはるがはる、二三の師團から、いくらかづつの兵を派出したものが集って、成り立ってをるのである。

拜啓。入營の當時は、兵營内のよーす

も、いっこー、わからず、まことに、こんきゃくいたし候ところ、このごろは、よーすも、あらかた、わかり、少しは、おちつき申候。

兵營内は、われわれの家とはちがひ、萬事に、正しききまりありて、おくるにも、いぬるにも、食事するにも、すべて、らっぱのあひずにより、おきたる時と、いぬる前とには、點呼といひて、いちいち、人員をしらべらるることに

候。また、上下の階級、はなはだ、正しくて、上官にあひたるときには、ただちに、手をあげて、敬礼すべきことに候。また、それぞれ、一定の服装ありて、おくるよりいぬるまでは、かならず、それを、正しく、着くべく、寢具のたたみかた、帽子のかぶりかたより、ぼたんをみがくことまで、いちいち、注意すべきことに候。ことに、銃器は、軍人のたましひなれば、その手入には、いっそ

一、注意すべきことに候。

姓名

このごろ、兵營内にて、習ひをり候こ
とは、學科と術科とにて、學科は、上官
の官、姓名、各種類の兵のみわけかた
と、そのつとめと、隊の編制、銃器のく
みたてと、その部分の名稱となどに
て、術科は、正しく、立つこと、左、右に向
くこと、正しく、歩むこと、銃の扱方な
どに候。これらは教育なきものには、
ずいぶん、困難なるよーすに候へど

教育

も、われわれ、小學教育をへたるも
のには、さまで、困難にはこれなく候。
ただ、新兵、いっぱんに、兵營内を、きゅーく
つに、感じ候は、前、申し上げ候とほり
の、種種の紀律あるがために候。しか
し、今は、やうやう、なれて、さほどに、感
ぜざるよーに、あひ成候。

紀律

まづは、近況御報知まで、かくのごと
くに御座候。敬具。

十二月十五日　　大山鐵三

報知

小泉　清君

第十二課　聯隊旗。

わが天皇の、御手づから、
さづけたまへる聯隊旗。
旗のてがらは國のほまれ、
旗のけがれは國のはぢ。
かたじけなくも、その緣は
皇后陛下の御手縫。
また、かしこくも、番號は
天皇陛下の御筆ぞ。

長き月日の、その間、
風に、さらされ、雨に、ぬれ、
軍馬の間を往來し、
黑きを旗のひかりとし、
さけしを旗のほまれとし、
ひとたび、えては、千代までも、
萬代までも、つたへゆく
聯隊旗こそたふとけれ。

第十三課　廢物利用。

ある日、おはなの家に、屑屋來りて、紙屑、ぼろ、がらす

のこはれなどを買ひたり。

おはなは、いぶかしげに、この様を見てありしが、やがて、屑屋の立ち去りたる後、母に向ひて、

「屑屋は、かのごとき物を買ひて、何にするか。」

と問ひたり。

母はこれに答へて、

「屑屋は、かのごとき物を、諸方の家より、買ひ集めて、これを、屑問屋に、賣るなり。

この屑問屋にては、これを、その種類によりて、えり分け、紙屑とぼろとは、製紙場に、賣り、がらすの

製造場

こはれは、がらす製造場に、賣るなり。

さて、製紙場にては、紙屑とぼろとをつくりかへて、紙とし、がらす製造場にては、がらすのこはれをつくりかへて、らんぷのほや、びんなどとして、これを、世に、賣り出すなり。

紙屑、ぼろ、がらすのこはれなどは、そのままにては、もはや、用ひがたき物なれども、かく、つくりかふれば、ふたたび、用ひらるべき物となるものなれば、けっして、いたづらに、棄つることなかれ。紙屑、ぼろなどは、かならず、屑籠に入れ置き、がらすの

棄

こはれなどは、安全なる所に、集め置くべし」。

と教へたり。

おはなは、また、

「紙屑、ぼろ、がらすのこはれなどのほかに、なほ、つくりかへて、ふたたび、用ひらるべき物となるものありや」。

と問ひたり。

母は、また、これに答へて、

「しかり。なほ、多く、あり。くさりたる酒は、醋に、製するをうべく、貝殼は、燒きて、石灰に、製するをうべく、石炭を蒸して、がすを製する時に、出づる、油のごとき、黑き汁よりは、種種の藥品と染料とを製するをうべし。

蒸灰

また、かの灰、ごみなどのごときは、そのままにては、使ひみちなきよーなれども、これも、作物などの、よき肥料となるものなり。

すべて、一度、用にたてたる物にて、そのままにては、もはや、用ひがたき物、または、使ひみちなきよーなる物をば、あるひは、つくりかへ、あるひは、工夫して、ふたたび、用にたつることを廢物利用と

いふ。廢物利用は、人の、よく、心がくべきことなり。」

と敎へたり。

第十四課　製紙。

紙ニハ、日本紙ト西洋紙トアリ。日本紙ハ、楮、ミツマタ、麻、マタハ、ガンピナドノ皮ノ纖維ヨリ、製シ、西洋紙ハ、ボロ、藁、マタハ、木材ノ纖維ナドヨリ、製ス。サレド、日本紙ハ、楮ヨリ、製シタルモノ、モットモ、フツーニ、用ヒラレ、西洋紙ハ、木綿ボロヨリ、製シタルモノ、フツーニ、用ヒラル。

楮ヨリ、日本紙ヲ製スルニハ、秋ヨリ春マデノ間、楮

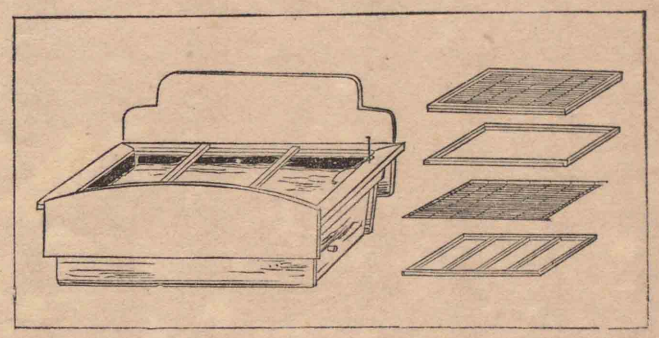
乾　流

ノ、イマダ、芽ヲフカザル時、コレヲカリトリ、二三尺ノ長サニ、切リ、タバネテ、釜ニ入レテ、蒸ス。

カクテ、ソノ皮ヲハギテ、乾カシテ、清キ水ニヒタシ、ソノヤハラカニナリタルトキ、小刀ナドニテ、ソノ皮ノ荒皮ト上皮トヲケヅリ去リ、マタ、乾カシテ、水流ニ、サラシ、サラニ、石灰ノ汁、マタハ、灰汁ヲマゼテ、釜ニ入レテ、煮ル。

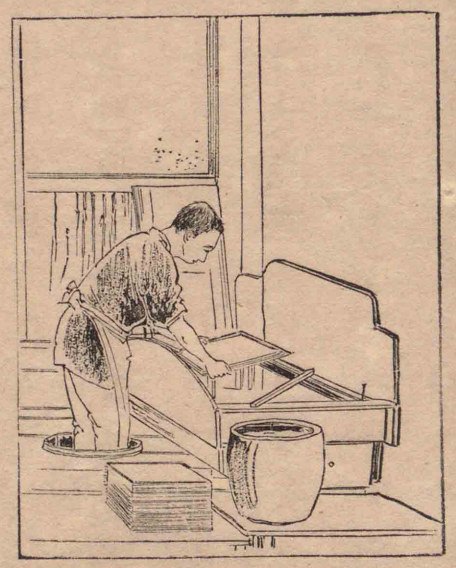
カク、煮タルモノハ、マタ、ジューブンニ、サラシテ、タタキダイニノセ、棒ニテ、タタキテ、綿ノゴトク、白ク、コマカキ纖維トス。

縦横

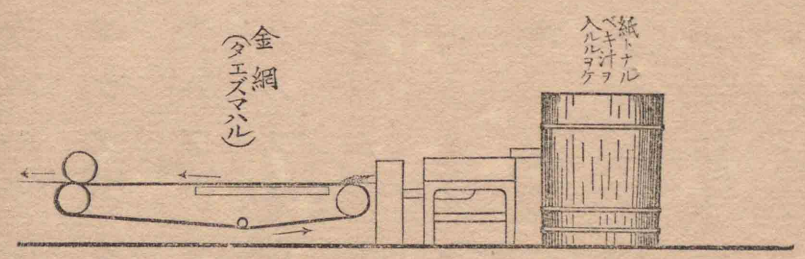


カク、シタルモノハ、コレニ、トロロアフヒノ根ヨリトレル汁、マタハ、タズトイフ木ノ皮ヨリトレル汁ヲマゼ、ヨク、カキマゼテ、漉槽トイフ箱ニ移シ、ワクニテ、ハサミタル簀ニテ、スクヒ、コレヲ縦横ニ、ユスリテ、ソノ汁ノ、イチヨーニ、マハリタルトキ、簀ヲ、漉槽ヨリ、上ゲ、水ヲタラシテ、敷板ノ上ニ、カヘス。カクテ、幾枚モ重ネテ、圧板ニテ、ジューブンニ、水分ヲシボリ、コレヲ、一枚一

枚ニ、ハナシ、張板ニハリツケテ、ハケニテ、スリ、日光ニアテテ、乾カス。ワレラノ、フツー、用フル日本紙ハ、カクテ、ハジメテ、製セラルルナリ。



次ニ、木綿ボロヨリ、西洋紙ヲ製スルニハ、マヅ、ボロノ中ヨリ、木綿物バカリヲエリ分ケ、石灰ノ汁ヲマゼテ、圓ク、大イナル釜ニ入レテ、蒸ス。カクテ、コレヲ大仕掛ノ機械ニカケテ、アルヒハ、コ

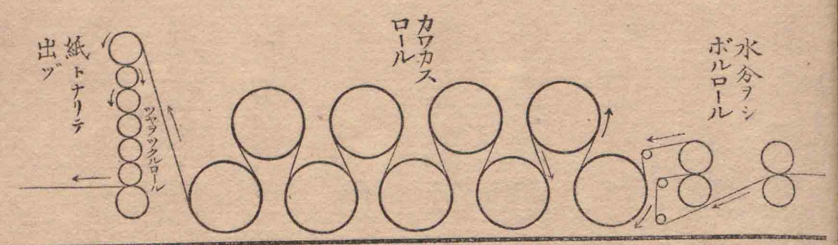


マカク、クダキ、アルヒハ、清ク、サラシテ、カノ日本紙ヲ製スルトキノゴトク、白ク、コマカキ纖維トス。

カク、シタルモノハ、コレニ、松脂糊、明礬、白キ粘土ナドヲ、ヨキホドニ、マゼ、ヨク、カキマゼテ、マタ、他ノ、大仕掛ノ機械ニカク。

コノ機械ハ、一ツノ金網ト、數十ノローラルトヨリ、成レルモノニシテ、金網ハ、日本紙ヲ製スルトキノ簀ノゴトク、水ヲ

順序



タラシテ、紙トナルベキモノノミヲ殘シ、數十ノロールハ、壓板、張板ナドノゴトク、アルヒハ、コノ水分ヲシボリ、アルヒハ、コレヲ乾カシ、アルヒハ、コレニツヤヲツク。ワレラノ、フツー、用フル西洋紙ハ、カクテ、ハジメテ、製セラルルナリ」。

日本紙ト西洋紙トハ、コレヲ製スル順序、カク、アヒ、ニタレドモ、一ハ、タイテイ、手ヲ用ヒ、一ハ、タイテイ、大仕掛ノ機械ヲ用フルガユエニ、ソノ勞力ト、製スル

價　餘騎

タカトハ、トーテイ、比較ニナリガタシ。シタガッテ、西洋紙ハ、日本紙ヨリモ、ソノ價、ハナハダ、ヤスクシテ、近來、印刷物ナドニハ、多ク、コレヲ用フルコトトナレリ。

第十五課　源爲朝。

源爲朝は源爲義の子なり。身のたけ、七尺ばかり、あり、武勇人にすぐれ、ことに、弓の名人なりき。保元の乱おこりたるとき、父に從ひて、崇德上皇のおんみかたにまゐり、わづかに、二十餘騎を從へて、白河殿の西門を守りたり。

矢　敵退

ときに、平清盛大軍をひきゐて、この西門にせめよせたり。爲朝、すなはち、人にすぐれたる、强き弓に大いなる矢をつがへて、まっさきに、進み來りし伊藤五めがけて、射はなちたるに、その矢、伊藤五の胸をつらぬきて、次に、進み來りし伊藤六にあたりたり。清盛これを見て、大いに、恐れて、逃げ去りたり。

爲朝の兄、源義朝、清盛にかはりて、また、西門にせめよせたり。爲朝「敵將をおびやかして、その軍勢を退けん」と思ひ、義朝めがけて、射はなちたるに、その矢、義朝のかぶとの星をけづり去りて、寶莊嚴院の門

矢竹

にあたりて、矢竹の中ほどまでも、とほりたり。このとき、義朝、爲朝に向ひて、「なんぢは人にいはるるほどの名人にあらざりけり。今のてぎはは、あまりに、つたなし。」といひたり。爲朝「われ、思ふことありて、わざと、射はづしたるなり。御許あらば、御身のいづこになりとも、射あてん。」といひて、矢をつがへたり。義朝、はなはだ、危し。義朝のけらい、深巢清國、これを見て、義朝の前に、立ちふさがり、つひに、その矢にあたりて、たふれたり。それより、また、爲朝の矢にあたりて、死ぬるもの、はなはだ、多かりければ、義朝は

久

ここを去りて、風上より、白河殿に火をかけて、せめ入りたり。

爲朝、今は、「これまでなり。」と思ひ、一方をうちやぶりて、近江の國まで、のがれしが、つひに、とらへられたり。かくて、斬らるべきはずなりけれども、あまりにめづらしき勇士なればとて、ゆるされて、伊豆の大島に、流されたり。

第十六課　一谷の戰。（一）

保元、平治の乱このかた、久しく、おごりをきはめてをつた平氏も、源頼朝が、伊豆に、おこって、これにてむかっ

てからは、戰爭するたびに、いつも、やぶられ、つひには、源義仲に京都を攻めたてられて、その一族は、ことごとく、西の方へ、逃げのびた。ところが、まもなく、頼朝と義仲との間に、爭がおこって、義仲も、とーとー、戰死してしまったので、平氏は、そのをりにつけこんで、十萬餘人の兵をひきつれて、攝津の國の一谷に、ひきかへした。

この一谷といふ所は、口は狹く、奥は廣く、南には、海をひかへ、北には、けはしい山をせおってをって、まことに、要害な所である。

平氏は、ここに、城をきづいて、用心堅固に、守ってをった。その城の東門から西門まで、三里の間、北、山の麓から、南、海の波うちぎはまでの間、いったいに、人や馬で、ふさがってをった。また、沖にも、いくさ船が、何萬といふほど、ならんでをった。そして、海と陸とは、平氏の赤旗で、ちょーど、一面に、火のもえたつよーであった。

頼朝の弟の範頼と義經とは、これを聞いて、さっそく、一谷を攻めた。範頼は五萬餘騎をひきつれて、東門に向ひ、義經は二萬餘騎をひきつれて、西門に向った。平氏はそれを聞いて、それぞれ、てわけをして、防い

だ。

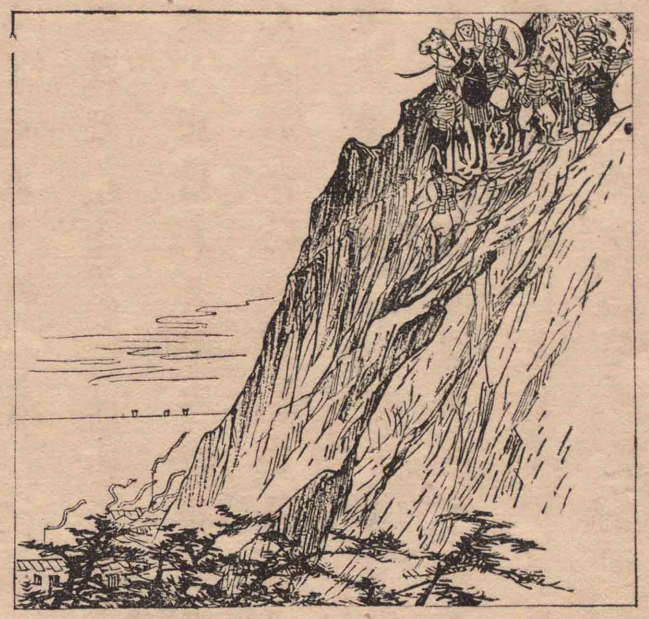
義經は、一度は、西門に向ったが、「間道から、ふいに、敵を攻めよう。」と思って、三千餘騎をえりぬいて、それをひきつれて、鵯越に向った。鵯越といふ所は、城の北にあたってをる、名高い難所である。それを、義經は、馬にむちうって、いっさんに、かけのぼった。しかし、けはしい所ばかりで、道はなく、行く先のめあても、しかと、つかんのに、日はくれてしまった。さすがの義經も、しばらくは、とほーにくれてをった。

第十七課　一谷の戰。（二）

鹿

義經がとほーにくれてをるところへ、けらいが一人の獵師をつれて來た。義經は獵師に向って、「さきまはこの山の地理を知ってゐるか。」とたづねた。獵師は「くはしく、ぞんじてをります。」と答へた。

そこで、義經は「ここから、一谷の城へ、おりることができるか。」とたづねた。獵師は「とても、できますまい。その城へ、おりる所は、まるで、屏風を立てたよーな、けはしいがけで、たやすく、おりられる所ではありませんぬ。まして、馬に乘って、おりることは思ひもよらんことです。」と答へた。義經は「それでも、鹿が通るか。」



とたづねた。獵師は「鹿は通ることもございます。」と答へた。義經はこれを聞いて、「鹿も四足、馬も四足。鹿に通れる所が、馬に通れんことがあるものか。さー。案内せよ。」といって、獵師を先にたてて、夜のうちに、ちょーじょーまで、かけのぼった。

夜は、やうやう、明けた。見おろせば、城は、何十丈とも知れんがけの下に、ある。東門、西門は、今、戰のまっさいちゅーである。

平氏は、「鵯越の難所から、敵が攻めこまう」とは、ゆめにも、思はんので、ただ、東と西とばかりを、いっしょーけんめいに、防いでをる。義經は「ここぞ。」と思って、「進め。進め」と、さしずをしたが、馬も恐れて、たちすくみ、人も、たがひに、顏を見合せて、進むものはない。このとき、義經は「われにならへ。」といひながら、一むちあてて、かけおりた。三千餘騎も、また、つづいて、かけおりた。

そして、息をもつがず、城に攻めこんだ。平氏は、ふいをうたれて、たいそー、うろたへた。義經は、時をはづさず、風上から、城に火をつけた。

平氏は、今は、三方から、敵に攻められて、防ぐこともできず、いよいよ、うろたへて、城をすて、門をすてて、海の方へ、逃げ出した。そして、爭って、舟に乘って、逃げようとしたが、限ある舟に、限ない人馬が乘りこむこともできず、とり殘されて、うたれたものが、おほぜい、あった。平氏の名將の、この海ばたで、討死したものもあった。

討死

舟に乘ったものは、讃岐の屋島に、逃げて行ったが、また、攻められて、長門の壇浦に、逃げ、また、攻められて、とーとー、一族一門、ことごとく、そこの海に、沈んでしまった。

一族

第十八課　アイヌ。

畫

次ノ畫ハ、北海道ニ、住ンデヲルアイヌ、スナハチ、北海道舊土人ヲカイタモノデ、左ノ方ハ男、右ノ方ハ女デアル。

アイヌノ男ハ、髮ヤヒゲヲ、長ク、ノバシテヲッテ、耳ニハ、カネナドノ輪ヲハメ、腰ニハ、マキリトイフ小刀

違

ヲサゲテヲル。マタ、女ハ口ノマハリヤ、手ノ甲ヤ、腕ナドニ、入墨ヲシテヲッテ、耳ニハ、ヤッパリ、カネナドノ輪ヲハメテヲル。

アイヌノ風俗ハ、コレダケデモ、ワレワレト、ヨホド、違ッテヲルガ、着物ヤ食物ヤ家ナドモ、マタ、タイソー、違ッテヲル。

アイヌハ、男モ、女モ、寒イ時ナドニハ、犬ノ皮ナド

袖細

デ、コシラヘタ、羽織ノヨーナモノヲ着ルコトモアルガ、ツネニハ、アツシ織デ、コシラヘタ、タケノ短イ、筒袖ノ着物ヲ着、足ニハ、アツシ織デ、コシラヘタ脚絆ヲハイテヲル。コノ脚絆ヤ、着物ノ袖ヤ、セナカヤ裾ナドニハ、木綿糸デ、イロイロナヌヒトリガシテアル。アツシ織トイフノハ、楡トイフ木ノ皮ヲ、細ク、サイテ、織ッタモノデ、コノアツシ織ヲ織ッタリ、ソレデ、着物ヲコシラヘタリスルノハ、女ノ仕事デアル。

マタ、アイヌハ、オモニ、粟、稗ナドヤ熊ヤ鮭ヤ鱒ナドノ肉ヲ食ベテヲッテ、ワレワレノヨーニ、米ヲ食ベル

捕

モノハ、ゴク、少イ。コノ粟ヤ稗ナドヲツクリ、熊ヤ鮭ヤ鱒ナドヲ捕ルノハ男ノ仕事デアル。

床
天井

ソレカラ、アイヌハ、ホッタテ小屋ノヨーナ家ニ、住ッテヲルガ、ソノ家ニハ、床モナク、天井モナイ。壁ハ藤蔓ナドデ、カヤヲククリツケタモノデ、屋根ハカヤヲナラベタモノデアル。

言語

アイヌノ言語ハ、ワレワレノトハ、マルデ、違ッテヲル。マタ、文字トイフヨーナモノガナカッタノデ、讀、書ナドハ、スコシモ、デキズ、數ノカンガヘガ、進ンデヲラナカッタノデ、コミイッタ計算ナドモデキナカッタガ、明

計算

治十年ゴロカラ、小學校ガデキタノデ、今デハ、ワレワレノヨーニ、讀、書モデキ、計算モデキルモノモアルヨーニナッタ。中ニハ、小學校ノ教員ニナッテヲルモノサヘアル。

サテ、アイヌハ、ズット昔ニハ、ズイブン、人數ガ多カッタガ、年年、ヘッテキテ、今デハ、二萬人タラズシカナイトイフコトデアル。ソレダカラ、明治三十二年ニ、北海道舊土人保護法トイフ法律ガ出テ、ソレカラハ、農業ヲシタイモノニハ土地ヲヤリ、ビンボーデ困ルモノニハ、農具ヤ種子ナドヲヤリ、病人ニハ、藥代ヲ

保護

熊

ヤリ、マタ、政府ノ費用デ、小學校ヲタテテヤルコトナドガデキルヨーニシテ、イロイロト、アツク、保護セラレルコトニナッタ。

第十九課　二人の旅人と熊。

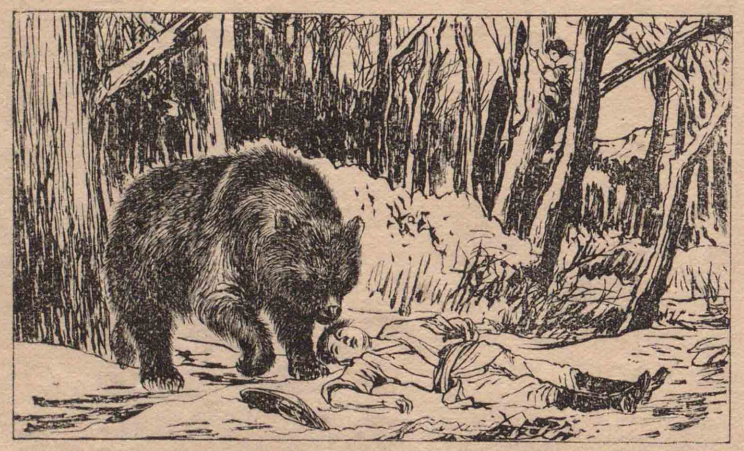
あるとき、友だちが、二人づれで、旅行しましたが、ある山路にさしかかったとき、ふと、熊にであひました。一人は、熊の來るのを、目早く、見つけて、びっくりして、つれのものには、すこしも、かまはず、いそいで、木の上に、逃げ上りました。

つれのものは、それよりは、すこし後に、見つけたの

倒

で、もう、逃げるひまもなく、手に、何も持ってゐません。のので、防ぐこともできません。

しかし、「熊は死んでゐる人はかまはんものだ。」といふことを、かねがね、聞いてゐましたから、路のまんなかに、倒れて、死んだもののまねをしてゐました。熊は、だんだん、近づいて來て、その人の耳や鼻や胸のあたりを、あちこちと、かぎ



様子

まはしましたが、いっこー、生きてゐる様子がありませんので、「いつもの行倒だな。」と思ったものか、べつに、かまひもせずに、いってしまひました。

そのとき、木の上に、上ってゐた友だちが、するすると、おりて來て、

「君は、どんなに、こはかったらう。ぼくは、木の上で、見てゐてさへ、ぶるぶる、ふるへてゐた。しかし、べつに、怪我もなくて、なによりだった。ときに。君。熊が、君の耳に口をよせて、何だか、話したよーだったが、あれはどんなことをいったのだ。話して聞かせたまへ。」

といひました。倒れてゐた友だちはをかしさをこらへて、

「なに。べつのことでもなかった。ただ、『危いときに、じぶんの身ばかりかばって、ひとの身の上を思はんよーなものとは、以後、つきあはんよーにせよ。』といったばかりだ。」

といひました。

第二十課　笠置落。

笠置の山の行在所、

仕

歩

また、賊兵におそはれて、
行くへも知らず、落ちたまふ
君のおとともに仕へしは、
藤房、季房、ただ、二人。
夜、晝、三日、食もなく、
歩み疲れて、松かげに、
ふさせたまふぞ痛はしき。
君は、御袖に、ふりかかる
露うちはらひ、「さして行く
笠置の山を出でしより、

天が下には、かくれがも
なし。」と歌はせたまひしに、
藤房、やがて、「いかにせん、
頼むかげとて、たちよれば、
なほ、袖ぬらす松の下露。」と
御返歌申し、泣きゐたる、
やみの天地を、また、もとの
御代にかへすはたが任ぞ。
金剛山下に、忠士あり。

をはり。

明治三十七年二月三日印刷
明治三十七年二月六日發行
明治三十七年三月十一日翻刻印刷
明治三十七年三月十四日翻刻發行

高等小學讀本卷貳
定價金七錢五厘

著作權所有

著作兼發行者　文部省
翻刻發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　大橋光吉　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　合資會社博進社　東京市小石川區久堅町百〇八番地

明治三十七年三月七日
文部省檢査濟

發行所　東京市日本橋區新右衛門町拾六番地
日本書籍株式會社

広島大学図書
2000301857